

トートロジー文とコピュラ文との関わりについて
——その意味構造に注目して——
Relationship between Tautology Sentence and Copula Sentence:
A Perspective of Semantic Structure

陳 訪澤／張 秀娟
澳門大学人文学院

要旨

従来の研究においては、トートロジー文を特殊なコピュラ文と位置付けて研究するものが多いが、コピュラ文と比べて、その特殊性はどこにあるか、両者はどのような関わりを持っているかなどについて、明確に答えたものはあまり見あたらない。本研究は西山（2003）の研究に基づいて、その意味構造に注目してトートロジー文「N は N_i だ」とコピュラ文「A は B だ」の関わりについて考察した。その結果、トートロジー文とコピュラ文の関わりは、意味構造から、前者が後者の部分集合で、両者は措定文（N は type 指示）、倒置同定文（N は観念上指示）、定義文において接点がある、ということが分かった。

キーワード:

トートロジー文、コピュラ文、意味構造、関わり

トートロジー文とコピュラ文との関わりについて¹ ——その意味構造に注目して——

陳 訪澤／張 秀娟
澳門大学人文学院

1. はじめに

レトリックにおけるトートロジーは論理学で常に恒真命題²として扱われ、表面的には何の情報も伝えないが、日常会話や文学作品においてその裏にある語用論的意味を活かして頻繁に用いられている。トートロジーはさまざまな形式を持っているが³、本研究は主語と述語に同一の名詞句が登場する「NはN_iだ」構文⁴のトートロジー名詞述語文（以下、トートロジー文という）を考察の対象とし、それとコピュラ文との関わりを究明する。コピュラ文は形式上「AはBだ」構文と「BがAだ」構文の2種類に分けているが、「NはN_iだ」構文との対応を考慮して、本研究の対象は「AはBだ」構文に限る。

従来の研究では、トートロジー文を特殊なコピュラ文と位置付けて研究するものが少なくないが、コピュラ文と比べて、その特殊性はどこにあるか、両者はどのような関わりを持っているかという問題について明確に答えているものはほとんど見あたらない。本研究の目的は西山（2003）の研究に基づいて、意味構造からトートロジー文とコピュラ文との関わり、つまり、トートロジー文とコピュラ文との対応関係について考察することである。西山（2003）の研究によれば、「AはBだ」構文のコピュラ文は意味構造から、措定文・倒置指定文・倒置同定文・倒置同一性文・定義文の5種類に分けられている。したがって意味構造から両者の関わりを究明するには、トートロジー文の意味構造を明らかにしなければならない。本研究では、文学作品やドラマのセリフからトートロジー文の用例を集め、語用論における関連性理論の立場からトートロジー文における名詞句NとN_iの指示性と意味構造を検討することによって、トートロジー文とコピュラ文との関わりを明らかにする。

1 本研究は澳門大學研究プロジェクト MYRG101(Y1-L2)-FSH12-CFZの一部である。

2 西川（2003）ではトートロジーを次のような論理式を用いて説明している。

$\forall x (W(x) \rightarrow W(x))$: すべてのxについて、xがWであれば、xはWである。

3 例えば、李（2003）では反復語の品詞によって、日本語のトートロジーを「体言型トートロジー」と「用言型トートロジー」に分けている。体言型トートロジーには「NはN型」「NがN型」「NもN型」「NというN型」などがあり、用言型トートロジーには「VにはV型」「Vこと（に）はV型」などがある。

4 トートロジー文の主語と述語に登場する名詞句は同じであるが、文法機能が違う。本研究ではそれを区別するため、主語の名詞句を「N」、述語の名詞句を「N_i」と表記する。

2. 先行研究と問題点

2.1 西山 (2003) によるコピュラ文の分類

西山 (2003:119-188) では、コピュラ文に登場する名詞句が指示性を持つかどうかによって名詞句を大きく指示的名詞句と非指示的名詞句⁵という 2 種類に分けている。さらに、指示的名詞句を type 指示と token 指示に⁶、非指示的名詞句を叙述名詞句と変項名詞句に⁷分類している。「A は B だ」構文のコピュラ文について、A と B に登場する名詞句の意味特性によって、コピュラ文の意味構造は、表 1 のように分類されると提案している。⁸

表 1：コピュラ文の分類

種類	意味構造	用 例
1	指定文	あいつは馬鹿だ
2	倒置指定文	幹事は田中だ
3	倒置同定文	こいつは山田村長の次男だ
4	倒置同一性文	ジキル博士はハイド氏だ
5	定義文	眼科医 (と) は目のお医者さんのことだ

それぞれの意味構造は次のように解釈される。

1. 指定文：A で指示される指示対象について、B で表示する属性を帰す。
A：指示的名詞句 (token 指示と type 指示) B：叙述名詞句
2. 倒置指定文：A という 1 項述語を満足する値をさがし、それを B によって指定する。
A：変項名詞句 B：指示的名詞句 (token 指示)

-
- 5 西山 (2003:59-63) によると、世界の中のなんらかの対象を指示する機能をもつ名詞句は指示的名詞句であり、それに対して指示する機能を持たないのが非指示的名詞句である。両者の区別は、文中の名詞句が述語との関係による意味機能上の相違であり、名詞や名詞句それ自体が有する性質ではない。また、指示される対象は、現実世界における時間・空間的な座標になる具体的対象のみならず、観念上の対象や心的な出来事、虚構世界や仮定の世界における対象、数や命題などのような抽象的な対象であってかまわないという。
 - 6 前者は総称文「子供はかわいいものだ」における主語「子供」のようなあるタイプを指示する名詞句であり、後者は「あの犬は賢い」における「あの犬」のような特定・個体の具体的対象を指示する名詞句である。
 - 7 叙述名詞句は「属性名詞句」とも呼び、性質・属性を表す名詞句である。例えば、「モーツァルトは天才だ」における「天才」は叙述名詞句であり、「モーツァルト」の属性を説明している。変項名詞句は、「だれ」「どれ」「どいつ」「どこ」といった項の位置にある値を問う疑問詞を内へ含んでいる名詞句である。例えば、「花子殺しの犯人はあの男だ」における名詞句「花子殺しの犯人」は意味的に「誰が花子殺しの犯人であるか」という疑問文を表しており、変項名詞句である。
 - 8 西山 (2003:119-188) のコピュラ文に関する分類には「A は B だ」構文も「B が A だ」構文もあるが、ここでは議論を絞るため、「A は B だ」構文の分類だけを示す。

3. 倒置同定文：A の指示対象が「どれ」であるかは了解されているが、それが何者であるかが不明である場合に、B の表現で A を他から識別する特徴的な記述を与えるタイプの文である。A は B で表わされるような特徴記述を満たしているものにほかならないというように A と B との関係を述べている。

A：指示的名詞句 B：指示的名詞句⁹

4. 倒置同一性文：A の指示対象をまず念頭におき、それは B の指示対象にほかならないと読むものである。A と B は世界のなかの一次的な個体を直接指示するような指示的名詞句であり、同一の指示対象をもつ。

A：指示的名詞句 (token 指示) B：指示的名詞句 (token 指示)

5. 定義文：A は定義される項であり、B は定義する項である。A は type 指示である。

もちろん、コピュラ文は文脈によってその意味構造が揺れる場合もある。例えば、西山 (2003: 167) では、次のような文は、文脈によっては、措定文にも倒置指定文にも倒置同定文にも解釈されると考えている。

(1) 山田さんは何でも反対する人だ。

2.2 トートロジー文の意味構造についての先行研究と問題点

これまで、コピュラ文と位置付けてその意味構造を研究したものには、管見の限りでは、久保 (1992) と小屋 (2002) の研究が挙げられる。

久保 (1992) では、坂原 (1990)¹⁰におけるコピュラ文の分類をもとに、「A は A だ」構文を記述文とし¹¹、A を普通名詞、固有名詞、代名詞に分けて考察した。また、例 (2) のような「説明拒否の用法」とされているトートロジー文についても、例 (3)、(4) を挙げながら検討した。

9 西山 (1990) では倒置同定文「A は B だ」における A と B をそれぞれ token 指示と type 指示だと指摘したが、西山 (2003) ではその考え方が変わっているようである。ただし、新しい提案はされていない。

10 坂原 (1990) ではメンタルスペース理論に基づいて、コピュラ文を次のように分類している。
①記述文 (A は B だ)：ある対象 A が属性 B を持つこと、即ち、A が属性 B を持つ要素の集合に属することを表す ($A \in B$)。

A：個体か属性 B：属性

②同定文 (A は B だ/B が A だ)：主語名詞句は値変化の役割解釈を受ける非指示的名詞句で、属詞 (述語名詞句) は役割の値を同定する。

A：役割 B：値

なお、西山 (2003: 149) によると、完全に同一ではないものの、①と②はそれぞれ「措定文」、「倒置指定文」、「指定文」と部分的に重なる概念である。

11 久保 (1992) では「コプラ文」という用語を用いているが、本研究で言う「コピュラ文」と同じである。ここでは用語統一のため、「コピュラ文」という用語を使う。

(2) 「セクハラ」ってなーに？ — 「セクハラ」は「セクハラ」だよ。

(3) 犯人は誰？ — *犯人は犯人だよ。

(4) 犯人って何？ — 犯人は犯人だよ。

(3) の「犯人は誰？」は同定文であり、「犯人は山田君だよ」と答えれば適格で同定文と考えられるが、「犯人は犯人だよ」は答えとして不適格である。一方、(4) は「犯人って何？」という記述文に対して記述文で答えると適格であるため、説明拒否のコピュラ文も記述文であると指摘している。

小屋 (2002) では、まずトートロジー文をコピュラ文と位置付け、その文には「差異否定の意味」と「差異強調の意味」の両義性¹²を有すると指摘し、「遅刻は遅刻だ」を例に取って、コピュラ文のどのタイプに属するかを検討した¹³。考察の結果、トートロジー文は定義文と分類されるが、「差異否定の意味」のトートロジー文は属性への解釈によって措定文に分類される可能性も残っていると主張している。

トートロジー文の意味構造についてコピュラ文の研究と関連して考察することは、今までの研究ではごく稀であり、久保 (1992) と小屋 (2002) の研究はとても有意義だと思われる。本研究はこの二つの先行研究に啓発されるところが大きいですが、まだ検討の余地が残っていると思われる。まず、久保 (1992) で説明拒否の文を記述文として解釈するのは妥当ではないように思われる。もしその解釈が妥当であれば、(2) における質問者は、回答の「セクハラはセクハラだよ」をセクハラのもつ属性として読み取るべきであるが、明らかに質問者はセクハラという言葉の意味がわからず、セクハラがもつ属性も分かるはずがない。したがって、説明拒否の文を記述文と解釈するのは適当ではない。また、小屋 (2002) でトートロジー文を「定義文」と分類しているが、措定文と解釈される可能性も残ると指摘している。ただし、この点については明らかにしていない。最後に、実際の例を見れば、トートロジー文をすべての文脈において一概に記述文または定義文として解釈するのは必ずしも適当ではなく、その解釈は文脈と大きく関わっていると思われる。

12 両義性について、小屋 (2002) は次のように規定している。

差異否定の意味：どのような X も X には変わりがない

差異強調の意味：X は Y ではない

もちろん、両義性を欠き、一義しか持たないトートロジー文もある。

13 小屋 (2002) が提案したコピュラ文の分類は本論文で参考にした西山 (2003) の分類とほぼ一致している。

3. トートロジー文の意味構造

前節で述べたように、西山（2003）によれば「AはBだ」構文のコピュラ文は意味構造から、措定文、倒置指定文、倒置同定文、倒置同一性文、定義文の5種類に分けられる。トートロジー文もコピュラ文と同じような「～は～だ」という構文なので、意味構造上、5種類のコピュラ文のうちのいずれかにあたることが考えられる。ここでは、西山（2003）の分類に従って、語用論における関連性理論からトートロジー文における名詞句のNと N_i の指示性と両者の意味構造関係を検討することによって、トートロジー文の意味構造を明らかにする。結論を先に言えば、トートロジー文は措定文（Nはtype指示に限る）、倒置同定文（Nは観念上のものを指示する）、定義文の3種類に解釈されるが、倒置指定文と倒置同一性文にはならない。では、この節からトートロジー文におけるNと N_i の指示性と両者の意味構造関係について検討していく。

トートロジー文を倒置指定文として解釈すると、Nと N_i は構造上命題関数の変項とその変項を埋める値の関係になる。具体的に言えば、Nは「誰」「どれ」「どいつ」「どこ」といった項の位置にある値を問う疑問詞が内在的に含まれている変項名詞句になり、意味的に「誰（どれ、どいつ、どこ）がNか」ということになる。それに対して、 N_i はその変項の値であり、意味的には「それは N_i だ」になる。その結果、倒置指定文と解釈される「Nは N_i だ」全体の意味は、「誰（どれ、どいつ、どこ）がNか」というと、それは N_i だ」となる。この解釈は問題になる。次の例を見よう。

(5) (田治見左衛門は村に逃走してきた武士の 3000 両の黄金を睨んで、村人を神社の前に集め、皆で奪いに行こうと唆している。亀井だけが左衛門の命令に反対している。)

亀井：何ぼあんたの命令でも、俺は反対じゃ。

田治見：なあ、亀井。そういうなら、くじで決めるか。

亀井：こんなもん、くじで決めるもんじゃねえ。人としてやっちゃいけねえことじゃ。

田治見：くじはくじじゃ、人ではのうて、ほとけのご意志じゃろうか。亀井のほかに反対する人がおるか。

(ドラマ・金田一耕助シリーズ『八つ墓村』)

もし例(5)の「くじはくじじゃ」を倒置指定文と解釈すれば、文の意味は「どれがくじか」というと、それはくじじゃ」になる。原文にあてはめると、全体の意味は「どれがくじか」というとそれはくじじゃ、人ではのうて、ほとけのご意志じゃろうか」となってしまう、その関連性は解釈できず、前後の文脈に合わないのである。したがって、「Nは N_i だ」は倒置指定文として解釈するのは適当ではない。

また、トートロジー文は倒置同一性文としても解釈できない。倒置同一性文はAの指示対象をまず念頭におき、それはBの指示対象にほかならないと読むものである。AとBは世界のなかの一次的な個体を直接指示するような指示的名詞句（token 指示）であり、同一の指示対象をもつ。例えば、「ジキル博士はハイド氏だ」のようなものである。ゆえに、「NはN_iだ」は倒置同一性文として解釈すれば、NとN_iは世界のなかの一次的な個体を直接指示するような指示的名詞句（token 指示）になり、両者の意味構造関係は「Nの指示対象=N_iの指示対象」である。即ち、一次的な個体を直接指示するNとN_iの意味はそれぞれ「この（その、あの）N」と「この（その、あの）N_i」になり、「NはN_iだ」の意味は「この（その、あの）Nはこの（その、あの）N_iと同一の人物／物…だ」になる。例えば、

- (6) (一休は川で大根を洗っている。その時、新右衛門が通りかかって、一休を「小僧」と呼んだ。一休は腹が立って、新右衛門をからかおうとしている)
- 一 休：では、お待さん、これは何だい。(大きい大根を挙げて)
- 新右衛門：大根だ。
- 一 休：じゃ、この小さいのは？(小さい大根を挙げて)
- 新右衛門：大人をからかうか。小さくとも大根だ。
- 一 休：大きくたって小さくたって大根は大根。だから、小さくたって、坊さんだよ。私は小僧じゃない。

(アニメ『一休さん』)

例(6)の「大根は大根」を検討しよう。もしこれを倒置同一性文と見たら、この文は「この（その、あの）大根はこの（その、あの）大根と同一のものだ」に解釈され、Nの指示対象「大根」とN_iの指示対象「大根」が同一のものだということを主張すると読み取れる。原文と入れ替えると、「大きくたって小さくたって、この（その、あの）大根はこの（その、あの）大根と同一のものだ。だから、小さくたって、坊さんだよ。私は小僧じゃない。」となってしまう。しかし、文脈から見れば、「大根は大根」は同一の具体的な個体を説明するためではなく、むしろサイズが違って同じ「大根」というカテゴリーのものであることを伝達するために使用されている。このような解釈は文脈と関連性を持っておらず、明らかにこの文脈と合わないのである。したがって、トートロジー文は倒置同一性文として解釈できない。

以上から分かるように、トートロジー文を倒置指定文と倒置同一性文として解釈することは適当ではない。それでは、措定文、倒置同定文、定義文として解釈するのはどうであろうか。それぞれ検討していく。

3.1 トートロジー文と措定文

措定文の「AはBだ」はAで指示される指示対象について、Bで表示する属性を帰すと、西山(2003)では述べている。Aは指示的名詞句(type指示とtoken指示)であり、Bは叙述名詞句である。そうすると、トートロジー文「NはN_iだ」を措定文と解釈すれば、次の条件が必要である。

(i) Nは指示的名詞句(type指示とtoken指示)で、対象の指示をする。

(ii) N_iは叙述名詞句で、Nの指示対象の属性を説明する。

この場合、Nの意味は「Nというの」(type指示の場合)、或いは「この(その、あの)N」(token指示の場合)になり、N_iの意味は指示対象Nの持つ属性として解釈され、トートロジー文の意味構造は、Nがtype指示の場合とNがtoken指示の場合、それぞれ次のようになる。

① Nがtype指示の場合：Nというの…(Nが持つ属性)だ。

② Nがtoken指示の場合：この(その、あの)Nは…(Nが持つ属性)だ。

では、具体的な文脈の中で、上に挙げた例(5)を見てみよう。まず、Nがtype指示の場合である。もし「くじはくじ」は措定文だとすれば、主語の「くじ」は指示的名詞句(type指示)と解釈され、意味的には「くじというもの」になる。この場合、述語の「くじ」は叙述名詞句として解釈され、「くじ」は指示する対象のもつ属性について説明するものである。勿論、物事にはいろいろな属性があり、「くじ」も例外ではない。例えば、「ランダムなもの、予見できないもの、神意を占うもの、公平なもの…」など、すべてくじの属性でありうる。その属性をどう捉えるかは、具体的にその文脈との関連性によって決まる。Sperber & Wilsonの関連性理論によれば、ある想定は文脈中での文脈効果が大きいほど、或いはその処理に要する労力が小さいほど、その文脈における関連性が高くなるということである¹⁴。上に挙げたくじの属性を一つの想定とすれば、トートロジー文「くじはくじ」に対する解釈は次に示すようにいくつかの想定を成す。

くじというのランダムなものだ。
くじというの予見できないものだ。
くじというの神意を占うものだ。
くじというの公平なものだ。
……

14 Sperber & Wilson (内田ほか訳 1999 : 151) は関連性について次のように規定している。
程度条件 1 : 想定はある文脈中での文脈効果が大きいほど、その文脈中で関連性が高い。
程度条件 2 : 想定はある文脈中でその処理に要する労力が小さいほど、その文脈中で関連性が高い。

それぞれの想定を原文「くじはくじ」に当てはめると、以下のようになる。

くじというのはランダムなものじゃ、	}	人ではのうて、ほとけのご意志じゃろうか。
くじというのは予見できないものじゃ、		
くじというのは神意を占うものじゃ、		
くじというのは公平なものじゃ、		

.....

この中では、明らかに3番目の想定「くじは神意を占うものじゃ」は文脈効果が一番大きく、その処理労力も一番小さいので、文脈との関連性が一番大きい。つまり、例(5)の文脈において、トートロジー文「くじはくじじゃ」は「くじは神意を占うものじゃ」と読み取るべきであると考えられる。以上は主語にある「くじ」を type 指示に解釈した場合であるが、では token 指示として解釈する場合はどうであろうか。主語の「くじ」を token 指示として解釈すれば、意味的には「この(その、あの)くじ」となる。この場合、「くじはくじじゃ」の意味は「この(その、あの)くじは神意を占うものじゃ、人ではのうて、ほとけのご意志じゃろうか」ということになり、不自然である。なぜかという、トートロジー文に「この(その、あの)くじは神意を占うものだが、ほかのくじはそうではない」という含意が含まれてしまうからである。つまり、話者は別にある特定の個体である「くじ」に対する説明をしているわけではないので、この解釈は文脈に合わない。したがって、Nの位置に登場する「くじ」は token 指示として解釈されない。

以上の分析で分かるように、トートロジー文は措定文として解釈することができる。ただし、措定文の主語Aは type 指示でも token 指示でも構わないが、トートロジー文の場合は、主語Nは type 指示として解釈したほうが一般的である。これについて、もう一つの例を検証する。

(7) (新右衛門は一休が帝の御子という正体を一休に教えた翌日の朝、安国寺の前の石階段に座っている。その時、一休が出てきた。)

新右衛門：おっ、これは一休さま。

一休：新右衛門さん、間違わないでよ。昨日まで、一休殿って言ってたでしょう。お役目はお役目。ちゃんと見張ってくださいよ。

(アニメ『一休さん』)

例(7)における「お役目はお役目」を措定文とすれば、主語の「お役目」は指示的名詞句に、即ち「お役目というのは」に解釈され、述語の「お役目」は叙述名詞句として解釈され、「お役目」の属性を説明するものになる。「お役目」の属性はいろいろあるが、最大の関連性として、例(7)の文脈において、「お役目」の属性は「役として責任をもって果たさなければならないこと」と解釈すべきであると考えられる。この場合、「お役目はお役目」は意味的に「お役目というのは、役として責任をもって果たさなければならないこと」となる。原文に当てはめると、「お役目というのは、役と

して責任をもって果たさなければならないこと。ちゃんと見張ってくださいよ。」となり、文脈と話者の発話意図が一致しているということが分かる。もし主語の「お役目」は token 指示と解釈すれば、「お役目はお役目」の意味は「この（その、あの）お役目は、役として責任をもって果たさなければならないこと。ちゃんと見張ってくださいよ。」となり、不自然になる。

もちろん、トートロジー文はすべて措定文に解釈されるわけではない。例えば、上に挙げた例 (6) であるが、もし「大根は大根」を措定文として解釈すれば、文の意味は「大根というのは、野菜だ／でんぷん分解酵素が多く含まれているものだ／根が大きいものだ…」となり、原文と入れ替えれば、「大きくたって小さくたって大根というのは、野菜だ／でんぷん分解酵素が多く含まれているものだ／根が大きいものだ…。だから、小さくたって、坊さんだよ。私は小僧じゃない」となり、文の意味が通じなくなるので、措定文として解釈できない。したがって、措定文として解釈できるトートロジー文が使用されている文脈の特徴を明らかにしなければならないと思われる。では、例 (5)、(7) について、その特徴を検討しよう。

まず、例 (5) であるが、文脈から見れば、田治見と聞き手の亀井、村人は皆「くじ」はどのようなものか、どのような属性を持っているかを知っている。つまり、「くじ」に関する情報は話し手と聞き手の頭の中にある知識として、話者と聞き手の共有知識である。「くじはくじ」の意味解釈と話者の発話意図から見れば、田治見は亀井と他の村人に「くじはどんなものか」を思い出させ、くじというものに対する共通認識を達成するために、即ち聞き手に「くじ」が持つ属性に関する共有知識を喚起させて、あるものに対する共通認識を成立させるために、この表現を使用したのだと考えられる。例 (7) も同じである。一休は「役目」とはどんなものか、どのような属性を持っているかを新右衛門に喚起させて、「お役目」ということに対する共通認識を達成するために、「お役目はお役目」と言ったわけである。したがって、措定文に解釈できるトートロジー文が使用される文脈の特徴は「聞き手にある物事が持つ属性に関する共有知識を喚起させて、その物事に対する共通認識を達成するためである」と整理することができる。

以上の分析をまとめると、次のようになる。トートロジー文は措定文と解釈することが可能で、主語に登場する N は type 指示として解釈するのが一般的である。また、このようなトートロジー文が使用される文脈の特徴は「聞き手にある物事が持つ属性に関する共有知識を喚起させて、その物事に対する共通認識を達成するためである」ということである。

3.2 トートロジー文と倒置同定文

3.2.1 倒置同定文

倒置同定文はAの指示対象が「どれ」であるかは了解されているが、それが何者であるかが不明である場合に、Bの表現でAを他から識別する特徴的な記述に関する情報を与えるタイプの文である。AとBの関係について、AはBで表わされるような特徴的な記述を満たしているものにほかならないと述べている。AとBはともに指示的名詞句である。ただし、西山(2003:170)で述べたように、Aは話し手も聞き手も認定できる対象を指示し、Bは世界の中の一次的な個体(人間や家、物など)を直接指示しているのではなく、Aを同定するための特徴的な記述を満たすものを指示するのである。また、西山(2003:168)で挙げた同定文の例(8)～例(12)から見れば、Aの指示対象は現実世界における特定の個体である具体的対象(例8、10、11、12)でも、観念上の対象(9)でもありうるものである。観念上の対象とは、現実の世界或いは仮定の世界における形のある物事(例えば、黒いチューリップ)ではなく、あくまでも人間の頭で想像した抽象的な概念である。例(9)の「家」は明らかに人間が居住する建物である「家屋」ではなく、婚姻関係や血縁関係を基礎とする抽象的な概念である。したがって、この文は「家というのは結婚し多少お金も貯まると欲しくなるものだ」とは言えるが、「家という家屋は、結婚し多少お金も貯まると欲しくなるものだ」とは言えない。そういう意味で、観念上の対象を指示する名詞句はtype指示と言ってよい。ただし、type指示は必ずしも観念上の物ではない。例えば、「私は白いチューリップが好きだ」における「白いチューリップ」は現実の世界における形のあるものなので、明らかに観念上のものではない。この文ではある特定の一本の白いチューリップを指すのではなく、全ての白いチューリップを指すのである。以上のように、観念上の対象を指示する名詞句はtype指示と言うが、type指示は必ずしも観念上の物を指すのではなく、現実の世界における形のあるものを指示する名詞句でもかまわない。

- (8) 本書は、涙なしにドイツ語をマスターできるものです。
- (9) 家は、結婚し多少お金も貯まると欲しくなるものだ。
- (10) あの男は、社長の片腕として信任の厚いひとだ。
- (11) これは、出廻らしになったコーヒー豆を乾燥させて固めたものです。
- (12) こいつは山田村長の次男だ。

以上から分かるように、倒置同定文と措定文との区別は形式上¹⁵以外には、Bの指示性の有無とその表現の役割にある。措定文として解釈されるコピュラ文「AはBだ」に登場するBは叙述名詞句であり、Aが指示する対象の属性を述べ、文全体はAの属性を説明するという意味になる。倒置同定文の場合は、Bは指示的名詞句であり、Aを他から識別する特徴的記述に関する情報を与え、文全体は、AはBによってAを同

15 同定文「BがAだ」は「AはBだ」に倒置できるが、措定文にはこの機能を持っていない。

定するという意味になる。これについて、西山（2003：171）では、「倒置同定文『AはBだ』では、『Aは何者か』という『Aを他から識別する同定条件に関する情報』を与えているのに対して、措定文は『Aはどんな人（もの）か』という属性に関する情報を与えている」と説明している。例えば、

- (13) a. 甲：あの人はいったい何者か。
 b1. 乙：あのひとは背が高い女性だ。
 b2. 乙：あのひとは、わたくしの息子のヴァイオリンの先生です。

(13b1)において、Bの名詞句はAの単なる属性以上の情報を与えていないため同定文として解釈しにくい、それに対して、(13b2)はBの名詞句がAを他から識別するのに十分な記述内容があるため同定文としての解釈が可能である。

3.2.2 トートロジー文と倒置同定文

トートロジー文はある特定の文脈において措定文として解釈されるが、倒置同定文はどうだろうか。もしトートロジー文「NはN_iだ」を倒置同定文として解釈すれば、次の条件が必要である。

- (i) Nは指示的名詞句に解釈し、話し手も聞き手も確定できる対象を指示する。N_iは指示的名詞句として解釈し、Nを同定するための特徴的な記述を満たすものを指示する。
 (ii) 文全体は「NはN_iで表わされるものにほかならない」という意味になる。

上に述べたように、Nの指示対象は現実世界における特定の個体である具体的対象でも観念上の対象でもかまわないので、Nの意味は「この（その、あの）N」と「Nというの」という二つの意味に読み取られる。「NはN_iだ」の意味はそれぞれ以下のようなになる。

- ① 「この（その、あの）NはN_iというものにほかならない」
 ② 「NというのN_iというものにほかならない」

以上の二つの意味解釈が適当かどうかについて、上の例(6)を見てみよう。例(6)における「大根は大根」を倒置同定文とすれば、文全体は「この（その、あの）大根は大根というものにほかならない」、或いは「大根というのは大根というものにほかならない」という意味になる。原文と置き換えると、「大きくたって小さくたってこの大根は大根というものにほかならない。だから、小さくたって、坊さんだよ。私は小僧じゃない」或いは「大きくたって小さくたって大根というのは大根というものにほかならない。だから、小さくたって、坊さんだよ。私は小僧じゃない」となる。この中では後者の意味が適切で、文脈と話者の発話意図とも一致している。前者は意味的に通じるが、話者は別に特定の具体的な1本の大根について述べているわけではないため、文脈に合わない。したがって、トートロジー文は倒置同定文と解釈することが可能であるが、ただし、Nは観念上のものを指示することになる。

それでは、上で述べた措定文に解釈されるトートロジー文は倒置同定文として読み取る可能性があるのだろうか。例(5)を検討してみよう。もし、「くじはくじじゃ」を倒置同定文として解釈すれば、文全体は「くじというのはくじというものにほかならないんじゃ」の意味になり、原文と置き換えると「くじというのはくじというものにほかならないんじゃ、人ではのうて、ほとけのご意志じゃろうか。亀井のほかに反対する人がおるか。」となり、明らかに文脈とも話者の発話意図とも合わない。なぜならば、話者は「くじはくじというものにほかならず、ほかの種類のものではない」ということを強調するためにこの文を発したわけではないからである。したがって、措定文に解釈されるトートロジー文を倒置同定文に読み取ることはできない。同じ「NはN_iだ」構文でも、使用される文脈が変わると意味解釈も変わってしまう。トートロジー文の解釈は文脈が決定的な役割を果たしているとも言える。次に、倒置同定文として解釈されるトートロジー文が使用される文脈の特徴はどうであろうか。例(6)において、新右衛門に「小僧」と呼ばれて腹が立った一休は大根を例として新右衛門の失礼さをからかおうとしている。一休の二つの質問と最後の文「大きくたって小さくたって大根は大根」からすれば、一休の発話意図は大きい大根も小さい大根も大根というものであり、どんな形をしていても大根にほかならず、ほかのものにはならないというところにある。言い換えれば、あるカテゴリーの中にはいろいろなメンバーがおり、プロトタイプのなものもあれば周縁的なものもあり、どんなメンバーでもそのカテゴリーから排除すべきではない。一休の発話「大きくたって小さくたって大根は大根」はその点を強調していると考えられる。そこで、倒置同定文と解釈されるトートロジー文が使用されている文脈は「あるカテゴリーにおけるメンバーはいくら周縁的だとしても、そのカテゴリーから排除できないことを強調する」とまとめることができる。

一言で言えば、「あるカテゴリーにおけるメンバーはいくら周縁的だとしても、そのカテゴリーから排除できないことを強調する」という文脈に用いられるトートロジー文は倒置同定文と解釈される。ここで注意すべきところは、このタイプのトートロジー文は構文から見れば、常に「ても／でも」「たつて／だつて」「～に変わりが無い」「やはり」などのような限定的な表現或いは副詞が前後に来るという点である。もちろん、明示的な限定的な表現或いは副詞などがなければ、それらを適切なところに入れてもかまわない。これは措定文と倒置同定文を見分ける一つのポイントだと言える。例えば、

(14) 「おい！とったぞ！」

「小さいなあ」黒谷は近づいて来て言った。

「しかし、とにかくタコはタコだ」

「まあ、夜の酔のものには充分だろう」

「杉山さんは？」

(曾野綾子『太郎物語』)

文脈から見れば、トートロジー文の「タコはタコだ」は倒置同定文と解釈することができる。これに限定的な表現或いは副詞を補うと、「しかし、とにかく小さくてもタコは（やはり）タコだ」とか、「しかし、とにかく（小さくても）タコはタコ（に変わりが無い）」となり、不自然でもないし、意味も変わっていない。したがって、限定的な表現或いは副詞の挿入は例（14）の「タコはタコだ」が倒置同定文であると判断する証拠として考えられる。

3.3 トートロジー文と定義文

トートロジー文には、措定文と倒置同定文として解釈できないものがある。これは先行研究で言う説明拒否として使われるタイプの文である。例えば、

(15) (仁科弘枝(女)と千歳一(男)は恋人同士。仁科弘枝は千歳一よ 10 歳年下)

仁科弘枝：あのう、今日泊まっていっちゃだめですか。

千歳 一：(びっくりして仁科弘枝を見ている) ...

仁科弘枝：だめですか。

千歳 一：だめ。絶対だめ。

仁科弘枝：どうしてですか。

千歳 一：どうしてって。

仁科弘枝：もう用意してあるんです。

千歳 一：だからだめだって。

仁科弘枝：だからどうしてですか。

千歳 一：10 も違うんだよ。

仁科弘枝：またそれですか。じゃ、どうして私と付き合ってるんですか。

千歳 一：それはそっちが一方的に来たっていうか。断れなかったっていうか。俺、責任持てないから。もし何かあったとしたら、責任持てないから。

仁科弘枝：責任って何ですか。

千歳 一：(消え入りそうな声で) 責任は責任だから。

仁科弘枝：私、自分の責任は自分で持ちます。

千歳 一：(頭を下げて黙っている) ...

仁科弘枝：意気地なし。(言いながら部屋から飛び出した。)

(ドラマ『元カレ』)

(16) 子供：姦淫ってなに？

母親：姦淫は姦淫。子供はそんなことは知らなくていいの。

(緒方 2006)

明らかに、例(15)における「責任は責任」は聞き手の仁科弘枝に「責任はどんなものか、つまりどのような属性を持っているか」への認識を喚起させて「責任」に対する共通認識を達成するために、或いは「どんな責任でも責任というカテゴリーから除外してはいけない」ということを強調するために発されたものではない。この点に関しては、例(16)はもっと顕著である。子供には「姦淫」についての知識が全くないので、母親の発話「姦淫は姦淫」は子供に「姦淫はどんなものか、つまりどのような属性を持っているか」という知識を喚起させて「姦淫」に対する共通認識を達成するために、或いは「どんな姦淫でも姦淫というカテゴリーから除外してはいけない」ということを強調するために発されたとは考えにくい。したがって、上の二例におけるトートロジー文は措定文と倒置同定文に解釈することは不可能である。また、文脈から見れば、例(15)も例(16)もある一次的な具体的対象「責任」、「姦淫」について話しているのではなく、倒置同一性文におけるAとBのtoken指示の解釈に合わないため、倒置同一性文にも該当しない。もちろん、倒置指定文にも当たらない。その原因の一つは倒置指定文におけるBはtoken指示に解釈されるためである。それでは、このようなトートロジー文は意味構造上コピュラ文のどのタイプに該当するのか。筆者はそれを定義文と解釈すべきだと考えている。

西山(2003:176)によると、定義文「AはBだ」において、Aは定義される項で、Bは定義する項である。そのうち、Aは概念を指示し、type指示とも言えるが、BはAの概念について説明するものである。そうすると、定義文と解釈する「NはN_iだ」は「Nというのは／Nとは何かというところ…N_iのことだ」という意味になる。例(15)における「責任は責任」と例(16)における「姦淫は姦淫」を定義文と解釈すれば、それぞれの意味は「責任とは何かということと責任のこと」「姦淫とは何かということと姦淫のこと」になる。原文に当てはめると、次のようになる。

(17) ……

仁科弘枝：責任って何ですか。

千歳 一：(消え入りそうな声で) 責任とは何かということと責任のことだから。

仁科弘枝：私、自分の責任は自分で持ちます。

……

(18) 子供：姦淫ってなに？

母親：姦淫とは何かということと姦淫のこと。子供はそんなことは知らなくていいの。

例(17)では、彼女に「責任」という概念の意味を問われ、詳しく解釈したくない(解釈を避けたい)ため、千歳一は同一の言葉で返事した。例(18)も子供に「姦淫」という概念の意味を質問された母親は、説明したくない(説明を避けたい)ため、同一の言葉で解釈した。意味的にも文脈と合致していて、不自然な感じがせず、また、話者の発話意図とも合っているため、定義文に該当すると思われる。もちろん、定義文と解釈されるトートロジー文も措定文、倒置同定文と同じように、ある特定の文脈

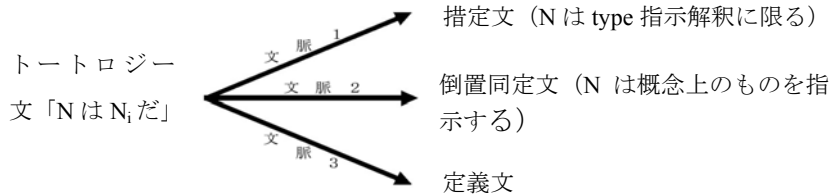
に使われる。ここで、例(16)を取り上げて定義文としてのトートロジー文が使用されている文脈を検討する。

例(16)では、子供が「姦淫」という言葉の意味がわからず、母親にその言葉への解釈を求めた。しかし、母親は質問してきた話者はまだ子供なので、教育上「姦淫」という概念を子供に教えるのはまだ早いなどの理由で、直接その言葉の定義によって説明せず、同一の言葉を用いて子供の質問をごまかした。したがって、定義文の解釈になるトートロジー文が使用されている文脈は「ある概念について問われた時、何らかの原因でその概念の真義を解釈しようとしないう説明拒否の場合」とまとめられる。

4. トートロジー文とコピュラ文との関わり

以上述べてきたことをまとめると、文脈によってトートロジー文は「措定文」(Nはtype指示の解釈に限る)、「倒置同定文」(Nは観念上のものを指示する)、「定義文」の意味構造に解釈される。具体的には、次のように整理される。

表2: トートロジー文の意味構造



文脈1: 聞き手にある物事が持つ属性に関する共有知識を喚起させて、その物事に対する共通認識を達成するための場合。

文脈2: あるカテゴリーにおけるメンバーはいくら周辺的だとしても、そのカテゴリーから排除できないことを強調する場合。

文脈3: ある概念について問われた時、何らかの原因でその概念の真義を解釈しようとしないう説明拒否の場合。

即ち、トートロジー文は文脈1に使われる場合は意味構造から措定文(Nはtype指示の解釈に限る)として、文脈2に使われる場合は意味構造から倒置同定文(Nは観念上のものを指示する)として、文脈3に使われる場合は意味構造から定義文として解釈される。西山(2003)で区別した「AはBだ」構文のコピュラ文の5分類と比べると、次のようになる。

表 3： コピュラ文とトートロジー文

コピュラ文	措定文	倒置指定文	倒置同定文	倒置同一性文	定義文
トートロジー文	△ (Nはtype指示解釈に限る)	×	△ (Nは観念上のものを指示する)	×	○

注：○=可。×=不可。△=可、ただし制限がある。

第3節で、トートロジー文「NはN_iだ」はコピュラ文「AはBだ」の要素か、或いは部分集合であるという仮説を立てた。表3からも分かるように、トートロジー文「NはN_iだ」はコピュラ文「AはBだ」の部分集合であり、その仮説は成立している。換言すれば、トートロジー文のカテゴリーはコピュラ文のカテゴリーに属し、両者の接点は{措定文(Nはtype指示解釈)、倒置同定文(Nは観念上のものを指示する)、定義文}にある。

5. 終わりに

本研究は西山(2003)の研究に基づいて、意味構造からトートロジー文「NはN_iだ」とコピュラ文「AはBだ」との関わりについて検討した。その結果、トートロジー文「NはN_iだ」とコピュラ文「AはBだ」との関わりは、前者は後者の部分集合で、両者の接点は措定文(Nはtype指示解釈)、倒置同定文(Nは観念上のものを指示する)、定義文にあるということである。本研究が考察したのは「～は～だ」構文のものであるが、名詞述語文は「～が～だ」構文のものもあるので、今後の課題として、それも考察の範囲に入れるべきである。

参考文献

- 緒方隆文 (2006) 「トートロジー：背景化による強調」『筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部紀要』1 筑紫女学園大学, pp.31-47
- 久保智之 (1992) 「日本語の同語反復コピュラ文に関する覚書—『時間は時間だ』と『時間が時間だ』—」『福岡教育大学国語科研究論文集』33, pp.44-56
- 小屋逸樹 (2002) 「トートロジーと両義性」『慶応義塾大学言語文化研究所紀要』34, 慶応義塾大学言語文化研究所, pp.1-25
- 坂原 茂 (1990) 「役割, ガ・ハ, ウナギ文」日本認知科学会編『認知科学の発展』3 巻, 講談社, pp. 29-66
- 西川真由美 (2003) 「Tautology の考察—ad hoc 概念の視点から」『語用論研究』5, 日本語用論学会, pp.45-58
- 西山佑司 (1990) 「コピュラ文における名詞句の解釈をめぐって」『文法と意味の間：国広哲弥教授還暦退官記念論文集』, pp.133-148
- 西山佑司 (2003) 『日本語名詞句の意味論と語用論：指示的名詞句と非指示的名詞句』ひつじ書房
- 李 森 (2003) 「日語中的同語反復」『解放軍外国語学院学報』Vol.26 No.2, pp.21-24
- Sperber, D. & D. Wilson. 1986, 1995. *Relevance: Communication and Cognition* (2nd edition). Blackwell.
- (内田・中達・宋・田中訳. 1999. 『関連性理論——伝達と認知——』第2版, 研究社)